

國學院大學学術情報リポジトリ

〔書評〕 大石泰夫著『祭りの年輪』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新谷, 尚紀, Shintani, Takanori メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000314

〔書評〕

大石泰夫著 『祭りの年輪』

一、祭りの年輪

本書の書名について、著者はまずその意味するところを、次のように説明している。「眼前に大木が立っているとしよう。大木を理解するには、大木そのものから目をそらさずしつかりみなければならぬことはもちろんだが、その木は大木になって屹立するまでは長い年月を経ている。そして、そのことは

新谷尚紀

大木の中に、年輪となって刻まれているのである。大木が大木にまで成長する過程には、毎年の四季の変化の影響があり、ある年には異常気象があり、時には大きな環境変化といったものがあつて、それが年輪を形成させる。長い年月からみれば、同じことの繰り返しにみえることもあるが、現実の一つ一つの積み重ねによつて成り立っているのである。年輪は、それぞれが断絶しているものではない。年輪の付置連関を知ることが、過去を知ることばかりではなく、現在そして未来をも知ることに

なるはずである」。

このような民俗伝承のとりえ方は、たしかに民俗伝承を、伝承 tradition と変遷 transition、という両面からとらえるということであり、民俗学（民俗伝承学）が研磨し発展させていくべき視点をよく理解しているものと読むことができる。生活文化についての伝承論の視点からの研究というのは、伝承 tradition と変遷 transition という運動 movement を歴史の流れの中に、いわば動画として追跡していくことだからである。

たとえていえば、歴史学や考古学が追跡する歴史世界は、その多くが一定の時代の事実をつかむという点でいわば静止画である。それに対して、民俗伝承学が追跡する歴史世界は、生活文化の歴史を伝承 tradition と変遷 transition という両者が組み合わさる動画としてとらえるものである。したがって、民俗伝承学の視点には、「本来のかたち」とか、「何らかの本質をもつ」とか、「祖型」などというとりえ方はありえない。論理的にありえないのである。

本書の緒論の文章からは、著者にはそのことがよく理解されているものと読むことができる。柳田や折口をよく読まず、またその後の誠実な先行研究をよく学ばないで書かれる文章の流通には困惑するばかりであるが、本書の著者をはじめ、なるべ

く多くの研究者からの鑑査の目が注がれ、注意が喚起され是正される必要がある。

二、民俗芸能研究の基本

ここに参考までに、民俗学への誤解を解くために、民俗伝承学の視点からみる民俗芸能研究の先行論文の一つを紹介しよう。それは民俗芸能研究が何をめざしているのかがよくわかる論考である。その一例が、後藤淑「民俗芸能と民衆文化」（『日本民俗学講座4』朝倉書店 一九七六）である。そこで後藤は、現在の五流能（観世・宝生・金春・金剛・喜多）の翁舞に注目して、能楽の大成に向けての歴史過程を知るためには民俗芸能の調査と分析とが必要であり有効であることを論じている。たとえば、能の翁の前段では、太夫（翁）と地謡じたいとのかけ合いで、太夫（翁）「とうとうたりたりら……」、地謡「ちりやたりたりら……」、太夫（翁）「所千代までおはしませ」、地謡「われらも千秋さむらはう」、太夫（翁）「鶴と亀との齢にて」、地謡「幸い心に任せたり」、このような七五調の今様いまよう四句神歌かみうたがあり、それをうたいおさめてから、翁の露払いと考えられる千歳の舞になる。その千歳舞の間に太夫は翁面をつけて翁となる。つま

り、「とうとうたたり云々」の語は翁の序歌としての意味をもつことになっている。そして、千歳舞が終わると本番の翁舞がある。翁は最後に「一舞い舞おう万歳楽」といつて退く。そして三番叟の舞になる。三番叟の舞は翁舞をまねたものである。この千歳・翁・三番叟を一緒にして「式三番」もしくは「翁」と呼んでいる。

それに対して、愛知・長野・静岡の三県の県境地帯つまり三信遠地方に伝えられる花祭りや田楽の中には、その能楽の翁の成立事情について考えさせてくれるものがある。たとえば愛知県北設楽郡の「花祭」では、「とうごばやし」や「さるごばやし」という曲目の中に、太夫「鶴と亀とのゆはひして」、列座のみょうど「さいわい心にまかせたり」というかけ合いがある。また、兵庫県加東郡社町上鴨川の住吉神社の翁舞でも、「六ぶん」の曲目の中に、「んにゃ鶴と亀とのお祝いに」、「幸い心にまかせたり」のかけ合いがある。つまり、a 能の翁と、b 花祭の「とうごばやし」、c 上鴨川の翁、の間にはその神歌のかけ合いの共通点からたがいに深い関係があることがわかる。ただし、よく注意してみると相違点もある。a 能の翁と、c 上鴨川の翁では、前段の四句神歌をうたう者と翁舞を舞う者とが一緒でしかも連続しているのであるが、b 花祭では「とうごばやし」な

どの神座での四句神歌と翁舞とが別人で切り離されていて連続していない。そこで、比較の材料をより多く集めてみる。すると、愛知県鳳来町の田楽や、長野県阿南町新野の田楽祭では、神歌の部分と翁舞とは切り離されており、神歌と翁舞の両者は別人とする伝承事例が多い。つまり、古典芸能として大成された現在の能楽では、翁舞の前段に四句神歌が位置づけられているが、それは歴史的にみればのちの変化であり、翁の神聖化が強く意識されていた中で四句神歌が翁の序歌として採り入れられたからではないかと考えられるというのである。

國學院大學の折口信夫が提唱した民俗芸能研究の視界には、このような比較研究による芸能の発生とその変化の動態解明という目的があつたのであり、その点こそ民俗芸能の若き後継者がこれから学び研究実践していくことがいま求められているといつてよい。それは歴史上の文献調査と現在の民俗調査という両者の勤勉の上に築かれる民俗伝承研究であり、それこそが折口が学生たちに繰り返し教え導いた方法であり、視点だったのである。

三、折口信夫の引用

本書で引用され論及されている折口信夫の文章の部分には、

評者としてはどうしても強い関心が向いてしまう。それは「万葉集の解題」（『折口信夫全集 第一巻』）からの二ヶ所の引用であるが、いずれもレベルのまったく異なる者の発言への論評に絡められている点が悲しい。折口の文章は、日本に歌の出来た始めから現在まで、「ずっと長い歴史が、源をほぼ一つにして、出發して居る」ということを説くものである。はじめ神の信仰、神祭りに関することはが律文で伝えられ、その失われない信仰が村々の安全を保たせるものと信じられた。神々の言葉、神自身の自叙伝である壽詞から叙事詩へ、また神の自叙伝である壽詞から土地の精霊に言い聞かせるための祝詞へ、また呪言へ、そして、大歌、宴歌、誄詞、片歌、旋頭歌、長歌、反歌、短歌、また性欲詩から恋愛詩へ、歌垣、踏歌、歌合せ、連歌、そして俳諧へ、という日本の歌の歴史を、俳諧を除けばすべて万葉集によって解くことができるというのである。論旨は明快である。引用は文脈に沿って、というのはよく言われることであるが、とくに折口の引用には慎重でありたい。本書の著者が「民俗の年輪」を読み取りたいというのはまさに正しい。ただし、その場合、折口のように歌や祭礼などの發生的順序、つまり、遠い古代から中世、近世、近代、現代まで連続して追跡できるように、な実証的な視点と方法とその研究実践が求められるのである。

古代と現代とだけへの論及では不十分であり、「意味が分らず繰り返される」伝承についても、その意味が分かっていた段階から、解釈が異なっていく段階の数々、そして意味が分からなくなってきた段階へ、という中世から近世へという歴史が必ずあるのであり、文献記録以外の民俗伝承情報の蒐集整理と、その比較論的研究によって歴史的な伝承と変遷の過程及びその力学関係を説明しようというのが、柳田や折口以来の民俗伝承学の独創的な研究展望なのである。

四、伝承と伝統と

本書は、第一編「神社・歴史・伝説」と祭り、と、第二編祭りの「現代と後継者」、の二部構成となっており、収録されている論文は、一九九二年（平成四）の「葛城一言主神社の秋祭り」から二〇一四年（平成二十六）の「イベントと民俗芸能」まで計九本である。研究者年齢という観点からみれば、新進気鋭の33歳から円熟の55歳までの論文を集めた一冊と思われる。さすがに若い時期の、第二章「葛城一言主神社の秋祭り」（一九九二）には力量が発揮されており、それに関連する第一章「古代ヤマトの信仰の世界観と神社の祭り」（二〇〇九）が配置

されて、古代と現代とを視野に入れて論じようとする姿勢がうかがえる。それに対して、後半の「秋田県湯沢市の小野小町伝説と祭り」以下、「地域」と民俗芸能―伝承のあり方を考える」までの7本は、現状の調査と伝承をめぐる問題についての論評となっている。いずれも現代社会に生きて活動する現場の研究者としての息遣いが感じられるものである。

ただここで、注意される点をあげておくならば、以下の2点である。一つは、第二章「葛城一言主神社の秋祭り」について、これは前述のように著者の若き時代の力作でかつて『葛城山の祭りと伝承』（桜楓社 一九九二）にも収録されており高く評価できるものである。ただし、研究というのは日進月歩であり、その吐田郷という同じ地域の民俗伝承について、二〇〇四年に「墓郷・水郷・宮郷をめぐる民俗学的考察―奈良盆地西南部・吐田郷の事例より―」（国立歴史民俗博物館研究報告『第112集』という新たな研究成果が提示されていることに、二〇一六年刊行の本書としては触れておいた方がよかつたのではないか。その方が本書の学史的な価値をより明白に示せるであろうということである。

もう一つは、本書に限らずであるが、多くの民俗芸能研究者が使う、伝承という語の使われ方についてである。伝承する人とか、伝承される地域とか、また伝承者、伝承の危機などとい

う表現も流通している。しかし、それらはいずれも伝承を日本語の単語と考えて用いているからであろうと思われる。無自覚なままであろうが、やはりここでいったん立ち止まって考えてみる必要がある。この伝承という語はもともと日本語ではなく、その基本は、柳田によるtradition populaireの翻訳語の民間伝承にある。つまり、traditionの翻訳語として新たに創られた日本語である。だから、同じtraditionの翻訳語としての伝統と伝承とはたがいに変換可能な語として用いられる必要がある。伝承するとか伝承者という語を無自覚に用いている人に対して、では、伝統するとか伝統者という言い方があるかといえ、それはないというしかないであろう。それをいうなら、伝承の動態とか、伝承の担い手、という言い方がふさわしいと考える。

以上、本書を読み論評する機会を与えていただき、あらためて学ぶところの多かつたことに感謝するとともに、民俗学の今の世代を担っている著者の活躍に声援を送りたい。そして、評者の辛口をあえて丸薬としていただき、さらなる研究進展を期待したい。

（四六判、二九八頁、ひつじ書房、二〇一六年四月発行、二八〇〇円＋税）